

1960年代の日本の実験映画のあけぼのには、歴史的な映画の創造とが二重写しになって見える

——飯村隆彦——

PART. 1 映画の創造と日本の実験映画のあけぼの

1 初期トリック映画集

(1902~04) 8分/16mm/モノクロ/サイレント

「魔法のサイコロ」(1902) 監督/メリエス

「マンモルトルの怪」 監督/ゼッカ

「いたずらなルル:パリの歌い子たちは救われた」(1903) 監督/ゼッカ

「イギリス人はカメラを呑み込む」(1903) 監督/ウィリアムソン

2 ルイ・リュミエール作品集

(1895~97) 7分/16mm/モノクロ/サイレント

「工場の出口」「赤ん坊の食事」「列車の到着」

リュミエール兄弟らが公開した世界最初の映画群は、駅のプラットフォームに蒸気機関車がやってくる情景をワンショットで撮したもの(『シオタ駅への列車の到着』)や、自分が経営する工場から仕事を終えた従業員達が出てくる姿を映したもの(『工場の出口』)など、計12作品。いずれも上映時間数分のショートフィルム。これらの映画の多くは単なる情景描写に過ぎなかったが、やがて筋書きを含む演出の作品が作られるようになった。(インターネットから)



3 ジョルジョ・メリエス (1861~1938)

「月世界旅行」(1902) 14分/16mm/1部着色モノカラー **日本初公開?** /サイレント

「天文学者の夢」(1898) 8分/16mm/1部着色モノカラー **日本初公開?** /サイレント

云わずと知れた特撮映画の父。ロペール・ウーダン劇場のオーナーにして手品師のジョルジュ・メリエスが映画製作に手を染めたのは、1895年12月28日のシネマトグラフ初上映会に足を運んだことが切っ掛けだった。当初はリュミエール兄弟と同様のドキュメンタリーが中心だったが、或る日のこと、オペラ座広場での撮影中にフィルムが引っ掛けてしまう。これを直して撮影を続行。現像して見て驚いた。なんと乗り合い馬車が突然に葬式馬車に変わってしまったのだ。つまりメリエスはまったくの偶然でトリック撮影を物にしたのである。(インターネットから)

4 飯村隆彦「60年代の実験映画」

「くず」(1962) 10分/モノクロ/音楽:小杉武久

「Ai (Love)」(1962) 10分/モノクロ/音楽:オノ・ヨーコ

「視姦について」(1962) 10分/B/W/color / 共作:中西夏之

「リリパット王国舞踏会」(1964) 12分/モノクロ

飯村隆彦の初期の代表作4作品を集めた傑作集。ジョナス・メカスが「美しさでオリジナリティと、ありぎたりのニセのシュール・レアリズムの映像ではない映画詩において際立っている。」として絶賛した「Ai (Love)」やナム・ジュン・パイクが「世界中で最初に作られたコンセプトチュアルな映画」と呼ぶ「リリパット王国舞踏会」など実験映画の古典として映画史に残る作品。

「この映画[リリパット王国舞踏会]にみなぎるパワーは、その驚くべき連合の数々と、飯村の観点から言うダダの調子を持った予期のできない出来事や要素からきている。」 ——サム・マックフレッシュ(フィルム・キュレーター)



PART. 2 映画の創造と日本の実験映画とビデオアートのあけぼの

1 エディソン・カンパニー作品集 NO.I

(1894~95) 12分/16mm/モノクロ/サイレント

「支那人の洗濯屋」(1894)

「メアリー・ケインの執行」(1895)

「ディクソンの実験録音映画」(1895)

2 エディソン・カンパニー作品集 NO.II

(1904~05) 7分/16mm/モノクロ/サイレント

「エジプト人の猿廻し」

「神経質なナットの花嫁へのキス」

「かかしの水揚げ」

アメリカの発明王トマス・アルヴァ・エジソン(1847~1931)が「キネスコープ」なるものを発明することに成功した。これは、大きな箱の中にフィルムを装填し、筒の中を覗き込むというシステムのもので、一度に一人しか見られないものであった。とても今日の映画と同じ物とはいえなければ、とにかく世界の人はちほあっと驚いた。(インターネットから)

3 エドウィン・ポーター(1870-1941)

「大列車強盗」(1903) 10分/6mm/セピアモノカラー **日本初公開?** /サイレント

「アメリカ消防夫の生活」(1903) 7分/16mm/モノクロ/サイレント

1903年にアメリカでも、エドウィン・ポーター監督による物語性のある作品『大列車強盗』が制作・公開される。この作品において、初めてクロスカットtingが用いられた。また、本作品は初の西部劇でもある。上映時間は10分に満たないが、ドラマティックな展開に、思わず引き込まれてしまう。ストーリーの面白さもさることながら、ラストにおいて本筋とはまったく関係ないショットを挿入している所に映画としての面白さがあると言えよう。(インターネットから)

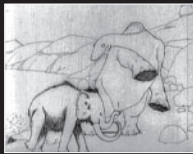
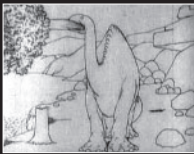


PART. 3 初期アニメーションと「映画の黙想のために」

1 ウィンザー・マッケイ (?-1934)

「恐竜ガーター」

(1914) 6分/16mm/
モノクロ/サイレント



2 ラジスラス・スタレピッチ (1892-1965)

「映画カメラマンの復讐」(1912) 11分/16mm/モノクロ/サイレント

3 ウォルト・ディズニー (1901-1966)

「ニューマンの笑い絵」(1920) 5分/S8mm/モノクロ/サイレント

「アリスの人食い」(1923) 7分/S8mm/モノクロ/サイレント

1920年、独立して個人事務所を設立したウォルト・ディズニーは、フリーランスの製作者として仕事を募集、カンザスシティの事業家フランク・L・ニューマンからの出資で初のオリジナルアニメ作品『ニューマン劇場のお笑い漫画』を制作した。質の高い娯楽作品は良い評価を得て、ウォルトの元にはアニメ制作の仕事が順調に舞い込む様になった。(インターネットから)

4 飯村隆彦:シネ・ダンス[映像舞踏]

「土方巽暗黒舞踏 あんま+バラ色ダンス」

(1963-2007) 32分/音楽:足立智美(2007)



土方巽の60年代初期の代表作で、歴史的な作品:「あんま」とさらに、「バラ色ダンス」は舞踏を語るには欠かせない問題作。映画は単にダンス記録である以上に、飯村の造語であるシネ・ダンスムフィルムによるコレオグラフィムとして制作された。土方舞踏に参加して、舞台上上がってカメラをもった「パフォーマンス」。映画はこの公演の唯一の「記録」で、土方舞踏と舞踏の基礎についての理解には必見の映画。最初のバージョン(1963)に未使用のフィルムを大幅に追加して、完成版(2001)とし、さらに足立智美の新しい音楽(2007)を加えた。

5 飯村隆彦:初期コンセプトチュアル・ビデオ集

「椅子 A Chair」(1970) 6分

「まばたき Blinking」(1970) 2分

「タイム・トンネル Time Tunnel」(1971) (Excerpt) 5分

「男と女 Man and Woman」(1971) (Excerpt) 2分

「視覚的論理(と非論理) Visual Logic (and Illogic)」(1977) (Excerpt) 8分

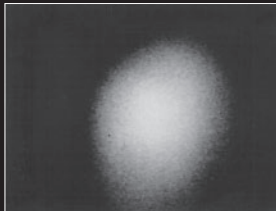


日本のビデオアートのパイオニアの一人である飯村が、ニューヨークから1969年に東京に戻って初めてビデオ制作した初期のコンセプトチュアルなビデオアート集。1960年代初期から始めた実験映画の方法をビデオアートに結合して、知覚における実験を試みた「椅子」他5作品。

4 飯村隆彦「映画の黙想のために」

「IN THE RIVER」(1969-70) 12分/16mm/カラー/Sound

「SHUTTER」(1971) 30分/16mm/モノクロ/音楽:佐藤慶次郎



「私は映画における想像が黙想から来ていることを発見した。カトマンズの聖なる川で見た水浴する男の記憶と光の明滅するハルシネーションの体験からだった。あなたにもこの二つの映画を追体験してほしい。」 ——飯村隆彦

「興味深いのは、川の流れの中で男が注意深く水浴する行為と、カメラを通してフィルムの流れの中で飯村が注意深く男の肉体的には単純な行動を分析することがパラレルな関係を生み出していることだ。瞑想体験は作品に提示され、こうしてそのミニマルな行為と静かなペースは観客が瞑想に入る可能性を与えるのである。」 ——スコット・マクドナルド